

Art Collectors' [Art Collectors' 賞]

スクリプカリウ落合安奈 (メインギャラリー)

スクリプカリウ落合安奈の「明滅する輪郭」シリーズは、日本とルーマニアという二つのルーツを持つ落合が、祖国で撮影した人々の顔にビニールを縫い付けている。そのビニールによって（呼吸）を可視化し、自己と他者がアイデンティティを越えて空気を共有していることを作品化している。表面的には息の詰まるような作品だが、自身のルーツや実験を基盤とした内的世界を他者と共有する手法が優れている。今後、意欲的な活動を期待していきたい。

アートのある暮らし協会 [ALSA 大賞]

宮北裕美 (メインギャラリー)

いつかこの目で舞われている姿を見たいです。“身近なものに踊ってもらう”すてきですね。

村山悟郎 (体育館／東京藝術大学 中村研究室)

菊池暁子 (体育館／秋田公立美術大学)

ART BASE 88 (宮本初音) [ART BASE 88 (宮本初音)賞]

楊珪宋 (メインギャラリー)

気がつけば 3331 ART FAIR では毎回植物をテーマにした作品を買っているようです。道ばたにふと目をやって目を離せないそんな感覚に光を当ててハッとさせてくれる作品です。

寺江圭一朗 (メインギャラリー)

2014年の動画は以前観て面白いなーと思っていました。石シリーズの展開に期待します。

李文 (体育館／3331 Arts Chiyoda)

計報に接し、悲しい想いでいたら、3331 に青い鳥がいました。アジアの新しい窓をあけた李文に感謝します。

AO NOSE [AO NOSE 賞]

青山夢 (体育館／東北芸術工科大学)

青山さんの作品を見た瞬間、その力強く妖艶でアイロニカルな作風に引き込まれました。私自身作家でもあり、20代の頃は横尾忠則や丸尾末広などに影響を受けた作品を作っていたのですが、金箔や貝シートを髹りに使い油彩やテンペラで仕上げるなどとは思いませんでした。高級なアンクルカルチャーに触れたようで感激し、気が付いたら購入しておりました(笑)。そして聞けば、西洋絵画に日本史を取り入れたとの事。過去の名画がふんだんに盛り込まれている事や、現在、美大で美術教育を受けられている事なども鑑みて美術史教育に重きを置く AO NOSE 賞に相応しいと思いました。今後の更なるご活躍を楽しみにしています！ AO NOSE / 山内康嗣

adNote [adNote 賞]

宮北裕美 (メインギャラリー)

時間とともに消えゆく音・動作・光一。
ダンサーや音楽家は、時間の流れに身をゆだね、その場に立ち止まることを許されていない。その神聖ともタブーとも言える領域に果敢に踏み込んだのが宮北である。映像作品「Drift」とともに展示された「Drift Trace Side」は、ダンサーが空間に紡ぎ出す動作を写し取ったかのようだが、止まっているはずのアクリルプリントからはその先にある動きや時間をより一層感じられた。「静」の中に「動」を生み出すダンサーならではの感性が光る作品である。

石鍋博子

スクリプカリウ落合安奈 (メインギャラリー)

伊藤洋志 [アートデモクラシー賞]

スクリプカリウ落合安奈 (メインギャラリー)

おそらく日本のものとおぼしき写真、とにかくたくさんの人が水遊びをしている。そして全ての人の顔の部分が「呼吸」を見る者に意識させるビニールで覆われている。日本における白黒写真は1960年代以降や江戸時代以外のものは、どうしても戦争の存在を想起させる。写真そのものには、ある夏の遊びの風景が展開されていて無数の人生の瞬間がある。

これが、国内においては戦争の気配の遠かった大正時代のものなのか、戦後すぐの開放感に溢れた風景なのかは分からない、分からないからこそ、このような風景の得難さを思い起こさせもするし、端的に公共の遊び場の快活さを見ることもできる。

アートデモクラシーなど大仰な賞を設定したものの、何をもってアートデモクラシーなのか、というのは当日まで決めかねていた。より民主的なアートの流通を試みている作家を選ぶことを想定していたが、結果的に民主的であることまたパブリックそのものを考える機会を得た本作を選んだ次第である。

稲葉智子 [稲葉智子賞]

牛島光太郎 (メインギャラリー)

牛島光太郎さんは、詩的ともナンセンスとも言えるような文章を丁寧に刺繍する繊細さと、道端で拾い集めた“名もなきもの”に言葉をつけて、個性や人格を与えてあげる優しさを持った人である。と言いつつ切れないのが、牛島光太郎さんだと思います。

作家のどんな部分(たぶん愛質的な部分)が、世界のどのような部分と交差することで、このような作品が生まれるのか。そう思いながら鑑賞していると、その交差する小さな点の上に自分も立っていることに気がつきました。

そのことが、今回彼の作品を購入した理由のひとつです。

“ポリティカル” “ソーシャル” といったメッセージを強く帯びていくわけではないけれど、彼の作品は、“作家からの「問い」に対して考察を深め、想像を広げる”ということを純粹に楽しませてくれる作品であり、そんな作品とこれらが生きていけるのかと思うと楽しみでなりません。

岩垂なつき [だれイワ賞]

安原千夏 (メインギャラリー)

映画が終わって流れていく文字の羅列。それは本来映画のキャストやスタッフ、関係した誰かあるいは特定の何かを示しているはずなのに、余韻に浸りながらしばらく眺めているとそれは意味を失い、単なるオブジェクトと化していく。

今回購入した安原千夏さんの作品はこのような現象をテーマにしたもので、エンドロールの中で並んだ文字が、次第にグリッドに見えてくるという視覚的なイリュージョンを扱っているのだという。私たちの「みる」という行為がいかに不確かであるか、幾分かユーモアとともに明らかにするこの試みは知的で、しかし普遍的に通ずるメッセージがあるように感じた。

また同時に「映画」というテーマを背景に持っている以上、どこかポエティックな含みもあり、それが一層作品を魅力的にしているようにも思う。

作家の今後の活動を心から楽しみにしている。

大石哲之 [Bigstone Collection 賞]

遠藤麻衣 (メインギャラリー)

遠藤麻衣さんは、ドガの浴室シリーズの絵画をもとに、描かれているモデルを現代風に演じた映像。ドガの発言を SNS のつぶやきのような軽薄な言葉に翻訳していたり、現在の視点でドガを再解釈しています。真剣にテーマや時代と対面している姿勢がよいです。映像クオリティも良く、今後大きな場所で勝負できる作品を作っていける力を感じました。

柳井信乃 (メインギャラリー)

柳井さんは歴史や史実、人物や土地などの社会的リサーチを元に、それらのストーリーをミックスさせて、新しい物語をつくる映像作家です。「思想家ベンヤミンがナチスから逃れるためにピレネー山脈を超える」という史実を下敷きにした作品は、重いテーマであり、よもするとステレオタイプな反戦になってしまうが、柳井さんの作品は、ドキュメントのようでもありフィクションのようでもあり、多層的で、鑑賞者の中にあるいろいろな感情や思いを生きさせます。非常に、印象的な作品でした。とても実力ある作家だと思います。ますますのご活躍を期待します。

山本聖子 (3331 CUBE shop&gallery)

マンションの間取り図を組み合わせたものがまるで幾何学的な模様ようになっており、レディ・メイドの趣を残しつつ、伸びやかで自由なペインティングをその上から載せていました。何処に飾ってもよい、素敵な作品ということで1票。